教育・研究の現場から

大学院経済学研究科・経済学部

Graduate School of Economics, Faculty of Economics

伊藤　正直
大学院経済学研究科　教授
http://www.e.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

現代の経済はきわめて多様な問題をわれわれに提起しています。一九八〇年代に「Japan as No.1」「Look East」と賞賛された日本経済は、九〇年代にはバブル崩壊後の「失われた十年」に陥りました。眼を世界に広げれば、多くの開発途上国が貧困からの脱出に苦悶し続け、八〇年代末からは、旧ソ連、東欧諸国において「社会主義体制」が崩壊し、市場経済への移行が始まりました。新興工業国・地域においても、一九八二年の中南米危機、九七年のアジア通貨金融危機など、成長の過程での種々の困難に逢着しています。先進国でも、財政危機、国際収支不均衡、金融不安定などの問題が継起し、その解決のための国内経済改革とともに国際政策協調の努力が続けられています。

大学院経済学研究科・経済学部では、現実が提起するこれらの問題を、的確に分析し、理解し、解決策を提示できるような研究を続け、そうした課題を担いうる人材の育成を目指してきました。歴史をさかのぼれば、東京大学において「経済学」の講義が開始されたのは、明治維新後間もない一八七八年（明治十一）のことで、その後、一九一九年（大正八）に経済学部が、第二次大戦後の一九六三年（昭和三八）に大学院経済学研究科が誕生しました。

真理を探求し、現実の経済問題を解決するために格闘するという経済学の性格ゆえに、経済学部は、時に、権力の弾圧を受け、あるいは厳しい理論的対立を生むなどの歴史をたどってきました。しかし、そうした困難を乗り越え、現在では、大学院経済学研究科に経済理論、現代経済、企業・市場、経済史の四つの専攻、経済学部に経済学科と経営学科の二つの学科をもち、八〇名近い専任スタッフ、三〇〇名におよぶ大学院生、八〇〇名をこす学部学生が、経済学の理論を、最先端の水準で学び研究するとともに、現実の経済や政府・企業・家計の制度的・歴史的・統計的研究を進めています。二〇〇四年には、大学院法学政治学研究科・法学部と共同で、専門職大学院として「公共政策大学院」を発足させ、公務員をはじめとする政策プロフェッショナルの養成も開始しました。

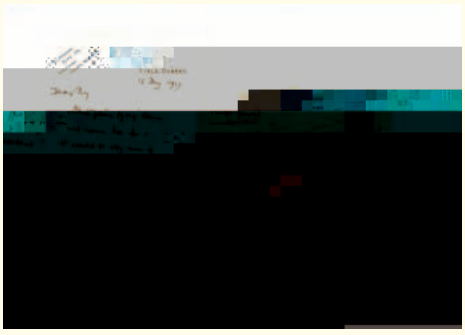
また、これらの研究を国際社会、国内社会との連携によって進めるため、大学院経済学研究科・経済学部に、「附属日本経済国際共同研究センター」、「附属金融研究センター」を併置し、内外の研究者、実務家との交流を日常的に図っています。

もう一つ、本研究科・学部が誇るべきものに、経済学部図書館があります。約六〇万冊の蔵書のなかには、マルクス自筆書簡、ケインズ・ハロッド往復書簡、アダムスミス旧蔵書など、世界中で本図書館しか所蔵していないものも数多く、加えて、内外の企業や企業家の一次資料の収集にも努めています。さらに、日本銀行貨幣博物館に並ぶ一万二千を超える古貨幣・二万五千枚の古札コレクションも蔵し、これらの蔵書・史資料は、内外の経済学研究者に広く利用されています。

二〇〇三年度からは、「市場経済と非市場機構の連携研究拠点」、「ものづくり経営研究センター」という二つの二一世紀COEプログラムもスタートしました。前者は、市場経済と非市場機構との連関メカニズムを、理論的・歴史的・政策科学的に解明し、新しい経済社会システムを構築するための道筋を示すこと、後者は、トヨタ生産方式や全社品質管理（TQC）など戦後日本企業が構築してきた生産・開発・購買の仕組み（「統合型ものづくりシステム」）の一般体系化を図ることを、それぞれ課題としています。この他にも、本研究科・学部のスタッフによる共同研究・プロジェクトも、数多く進められています。こうした研究を基盤に、大学院経済学研究科・経済学部は、アジアにおける経済学研究の最大の拠点として、世界に向けて、新しい経済学、深い経済分析を日常的・継続的に発信していきたいと考えています。

古貨幣コレクション

アダムスミス文庫


ケインズ・ハロッド書簡集